

人面・土偶装飾付有孔罌付土器の研究

渡 辺 誠

-
- | | |
|----------|------------|
| 1. はじめに | 3. 関連資料の検討 |
| 2. 事例の検討 | 4. 考察 |
-

1. はじめに

筆者らは人面・土偶(人体文を含む)装飾付土器のうち、すでに深鉢形土器・釣手土器・注口土器について、その基礎資料の集成と若干の検討を行ってきた¹⁾。これらのなかでもっとも重要な深鉢形土器の人面について、土器面につく位置などからⅠ～Ⅳ類に分類し、Ⅳ類をもっとも発達したタイプと考えた。そしてその時期は縄文中期前半の勝坂、藤内・井戸尻式期であり、その分布は山梨県を中心にした西関東から長野県中・南部にかけての範囲であることを明らかにしてきた²⁾。

縄文前期に出現し中期前半に発達した有孔罌付土器もまた、その中心地域はほぼ同様である³⁾。そしてこれらにも深鉢形土器と共通して、人面・土偶装飾がみられるのであり、本稿ではこれらと関連資料の集成を行い、若干の検討を行なうこととする。

2. 事例の検討

9例出土している。東京都1例・神奈川県1例・山梨県3例・長野県4例である。長野県にもっとも多く、山梨県の3例も長野県寄りの地域である(図1)。これらを東から順に検討する。

(1) 東京都調布市原山遺跡出土例(図2-1、写真1-1)

調布市教育委員会による1993年の発掘においてSI-01住居址より出土し、次のように報告されている⁴⁾。

有孔罌付土器は底部が故意に壊されている以外はほぼ完形品で、住居中央部北側の床面から僅かに浮いた状態で出土している。ほぼ正位に近い状態であるが、胴部には浅鉢形土器の大型破片を覆せ、欠損する底部の部分には、円筒深鉢の土器の底部を嵌め込んだ、きわめて特異な出土状態である。器形は、頸部が直線的に立ち上がり、胴部が大きく張り出した壺形で、口径24.5cm、高さ31.5cm、胴部最大幅39cmを計る。

文様は胴部と頸部に施されている。文様帯は、隆帯によって目と口を表した人面を正面とし、これを中心に、腕、手、指を左右対称に配し、さらに2単位の菱形区画文に環状の凸帯を配した文様構成である。

この出土状態は、住居廃絶時の祭祀行為を示している。このような出土例は、山梨県須玉町津金御所前遺跡を代表的な例として、人面・土偶装飾付深鉢形土器・釣手土器にしばしば認められる。そしてそれらは女神の身体に見立てられた土器の底部を抜くことによって、再生を前提として女神を殺害する象徴的な儀礼の行なわれたことを示唆している。

このように考えると、顔を囲むのは手ではなく、足とみる可能性が生じてくる。手ではそのような状態が実際にはあり得ないが、足であればヨガのポーズのなかにみることができる。それは股間から新しい生命の誕生を示していると考えられ、儀礼のなかでこのような所作が実際あったと理解すべきであろう。2単位の菱形区画文も陰部の表現とみられる。

時期は勝坂式期である。

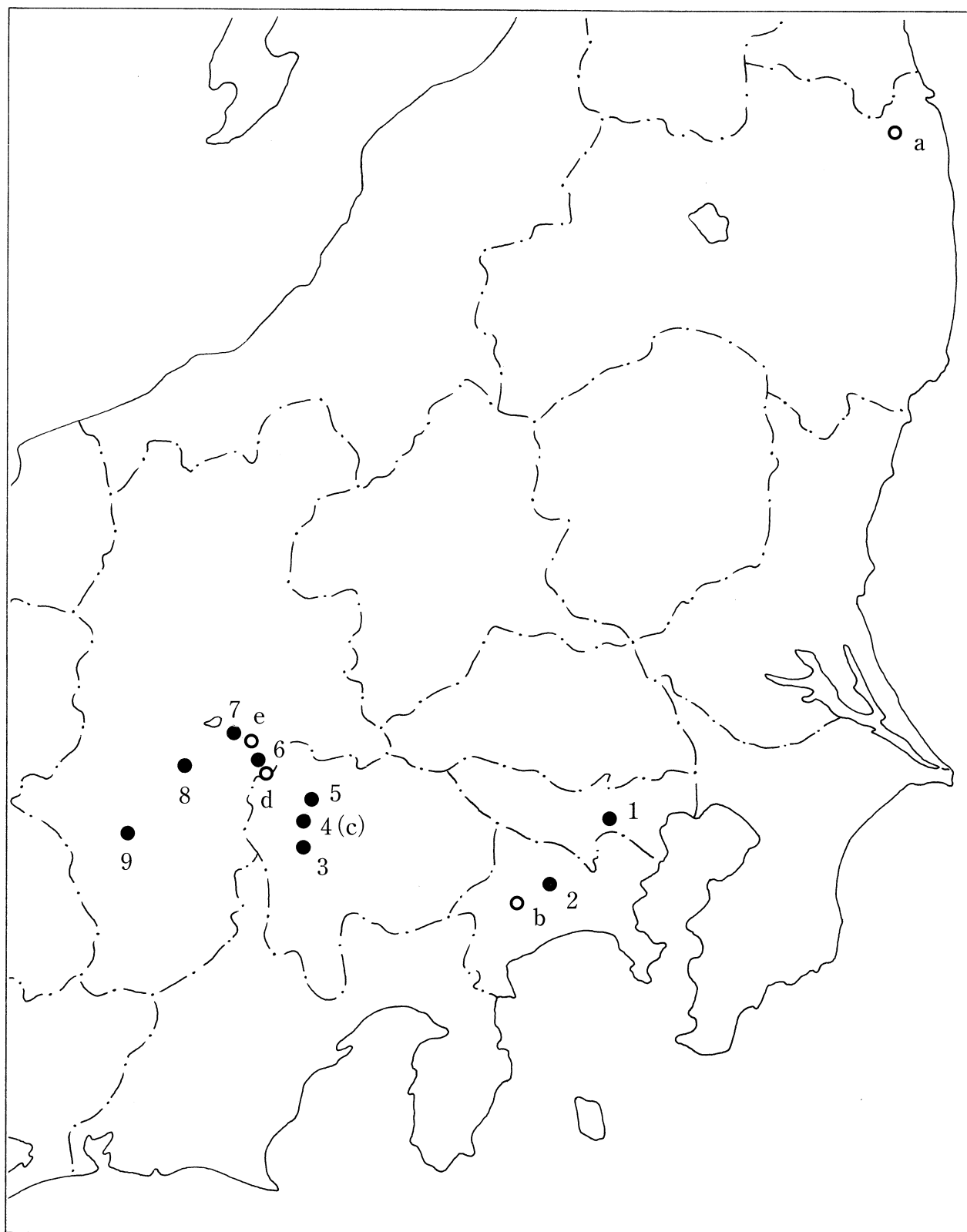


図1 人面・土偶装飾付有孔罎付土器(●印)および関連資料(○印)出土遺跡分布図
 1: 原山 2: 林王子 3: 鋳物師屋 4 坂井 5: 諏訪原 6: 藤内 7: 札沢 8: 久保上ノ平
 9: 大野 a: 上栃窪 b: 寺山金目原 c: 坂井 d: 井戸尻 e: 中道尾根

(2) 神奈川県厚木市林王子遺跡出土例(図2-2)

本例も住居址より出土しており、次のように記されている⁵⁾。

住居址の中央部から炉の周辺部にかけて、覆土中及び床面近くから多数の礫が検出されている。人体装飾

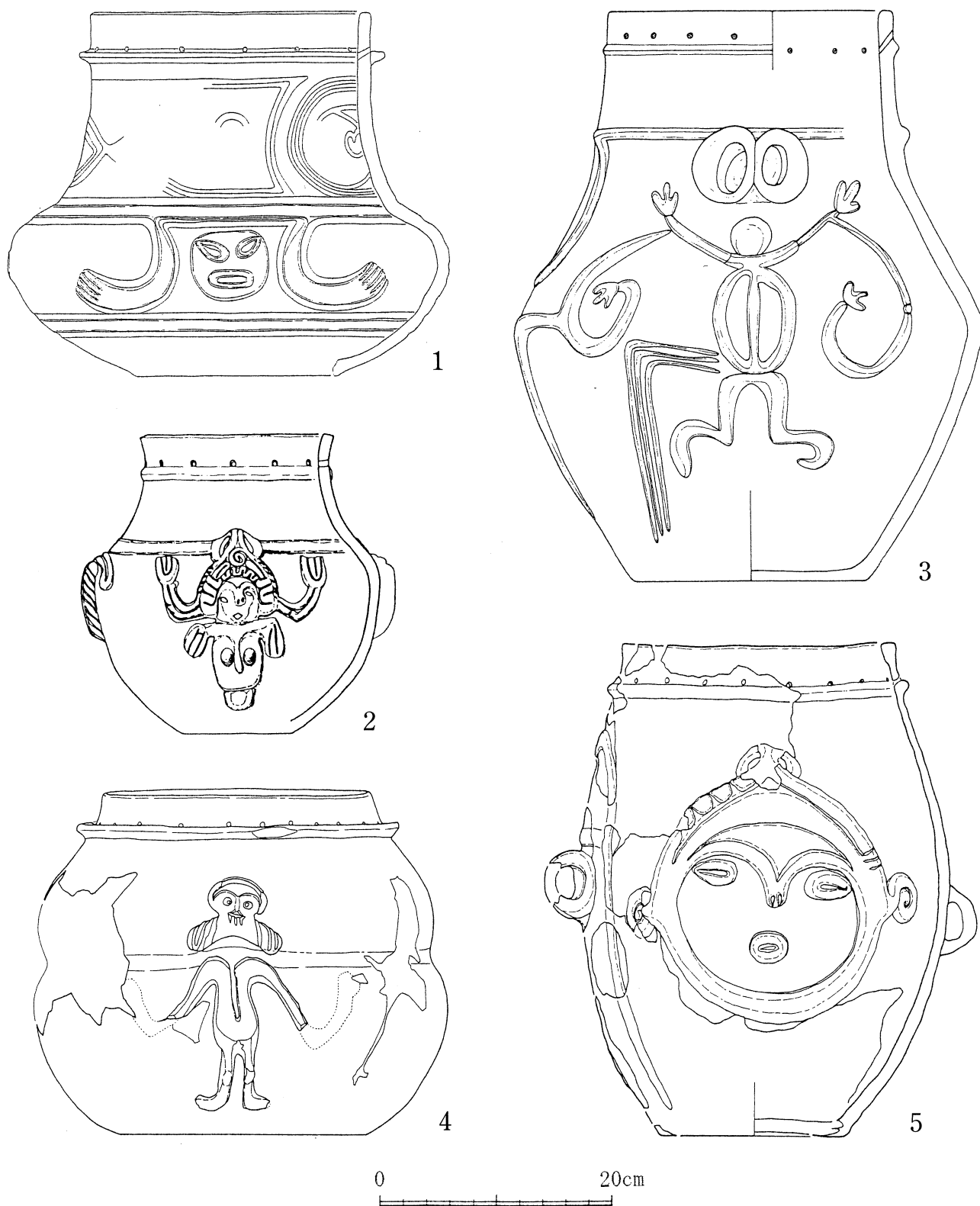


図2 人面・土偶装飾付有孔罎付土器実測図(1:調布市教育委員会提供、他は報告書などより引用)
1:原山 2:林王子 3:藤内 4:久保上ノ平 5:大野

付有孔罎付土器は、炉の近くから、他の勝坂式土器とセットになって発見された。

この人体装飾付有孔罎付土器は、口頸部には小孔がめぐり、罎状の張出しがついている。球状に張出した胴部中央に、妊婦を思わせる人体装飾が付けられている。頭から伸びた手は左右に広げており、首から垂れた手は小さくどちらも三本指である。人体の胴部は自然と細まって、足の表現はみられない。人体の両側に



写真1 人面・土偶装飾付有孔罎付土器写真(縮尺不同)

1: 原山 2: 坂井 3: 諏訪原 4: 久保上ノ平 5: 大野

は、頭を上体にまいた二匹の蛇体装飾がみられる。蛇頭は三角形をなしているところから、マムシを表現したものであろう。現存部高さ25.5cm、人体像の高さ17.8cmである。

本例も底部を欠き、出土状態とともに原山遺跡例に類似している。またこの頭部表現は、人面装飾付深鉢形土器の人面装飾のもっとも発達したⅣ類とされるものに共通している。三本指は普通の人間ではなく、カミで

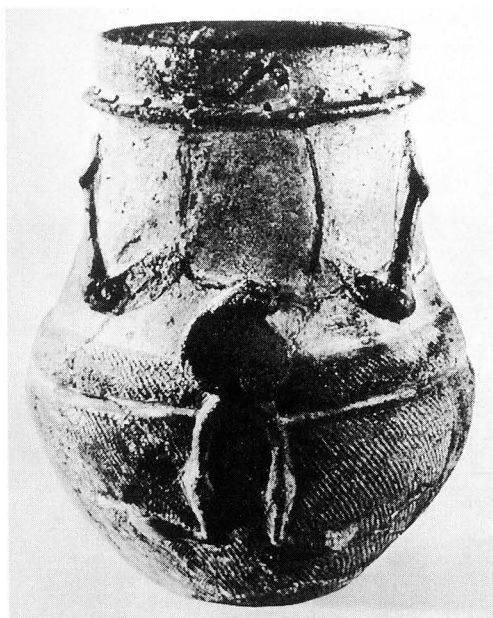


写真2 札沢遺跡出土土偶装飾付有孔罎付土器写真(日本原始美術1より)



図3 鋳物師屋遺跡出土土偶装飾付有孔罎付土器実測図(報告書より)

この個所の解釈如何にかかっていると考えていい。さらに胴部をめぐる施文も、裏面は太陽を思わせる二重円で赤く塗彩されている。表面は奇妙な生物らしいものを表現し、三本指の掌らしいものの描写がここにもでてる。これについてはいろいろな説がある。トカゲ説、カエル説、人体説、そのうち踊る人説などもある。

あることを示していると理解される。

- (3) 山梨県南アルプス市(旧櫛形町)鋳物師屋遺跡出土例(図3)
本例も住居址より出土しており、次のように記されている⁶⁾。

P1付近に礫とともに床面より若干浮いた状態で出土。
口径24cm、胴部細大径36cm、器高54cmをはかる。中期前半(藤内式期)。

- (4) 山梨県韮崎市坂井遺跡出土例(写真1-2)
志村滝蔵氏の発掘資料である⁷⁾。

これは例外的な小型品である。完形で、口径6.1cm、高さ7.9cm。人面は直径3.9cmの円形でやや膨らみ、他に同様な膨らみが2個あるが、それらには人面はみられない。文様や共伴資料がなく、中期とみられるが、細別は不詳である。

- (5) 山梨県北巨摩郡明野村諏訪原遺跡出土例(写真1-3)
明野村教育委員会による2003年の第8次調査によって発掘され、次のように発表されている⁸⁾。

有孔罎付土器に土偶状の装飾を貼り付けた深鉢形土器で、直径55cm、深さ75cmの土坑底部から出土しました。土器は土坑に埋められた時点で既に割られ、土偶装飾の上半分になっていたようです。その後、新しい住居の柱穴を掘る際に、さらに一部がこわされ失われています。推定される土器の大きさは、直径30cm、高さ50cm程度で、現存する土偶装飾は縦12cm、横14cmです。

この土偶の手は、次の藤内遺跡出土例に類似し、通常の腕の表現にさらに左右に大きく広げた腕を加えている。また頭部は中空になっていて、人面装飾付深鉢形土器のもっとも発達したⅣ類に共通している。割られて埋められているのは、原山・林王子遺跡出土例と同様に、祭祀の後に再生を祈願したものと考えられる。井戸尻式期。

- (6) 長野県諏訪郡富士見町藤内遺跡出土例(図2-3)

藤森榮一・武藤雄六氏らによって発掘された特殊遺構の出土品であり、井戸尻Ⅰ式の標識資料を構成している土器でもある。この特殊遺構は住居址群に囲まれた広場にあつて、きわめて祭祀的な性格が強い。有孔罎付土器は大型で、高さ50cmあり、次のように記されている⁹⁾。

有孔罎付土器は、これはまた、最高に発達した頃の優品で、直立する口縁、その下部の第一罎と、その上をめぐる16個の小孔、そして第二の罎帯、これが、この樽上土器の機能についての本質的な部分で、用途の如何は、こ

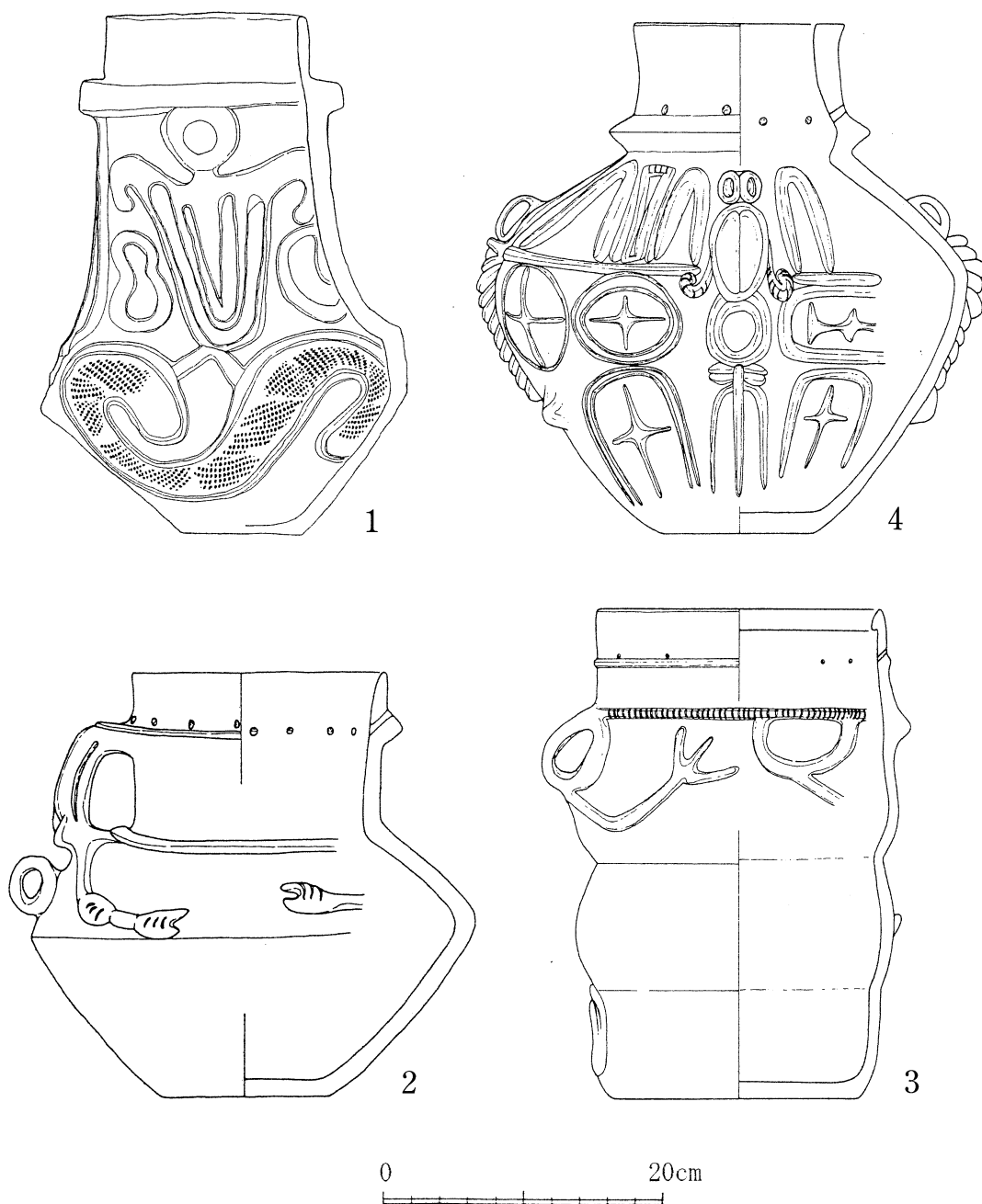


図4 関連資料実測図(各報告書より引用) 1:上栃窪 2・3:井戸尻 4:中道尾根

土器形態の機能を考える論旨によって、具象する生物が変わってくるようである。

腕の表現は興味深い。両手首から下に、大きく円を描くように第2の腕が追加されている。胴部は丸く膨らみカエル説の根拠ともなっているが、妊娠状態を示しているとも考えられる。また下腹部からは左にくの字に曲がる表現がみられ小便とみる人もいるが、酒器とみれば女神の身体から酒が出てくると同じことになる。

(7) 長野県諏訪郡富士見町札沢遺跡出土例(写真2)

『日本原始美術』1に、藤森榮一・江坂輝弥氏によって次のように紹介されている¹⁰⁾。

この土器によじ登るように人体かと思われる浮文が描かれている。四肢の先端が水かきようにも観られ、江上氏の蛙説も一考に値する。中央のハート形の部分は、この時期の土偶の臀部によく見るところである。

頭部を欠くが、上記のように臀部の切れ込みがあるので、後ろ向きで土器を抱え込んでいる表現とみられ、両腕をあげているのもこのポーズに関係があると考えられる。高さ35.2cm、藤内式期。出土状態などは不明である。

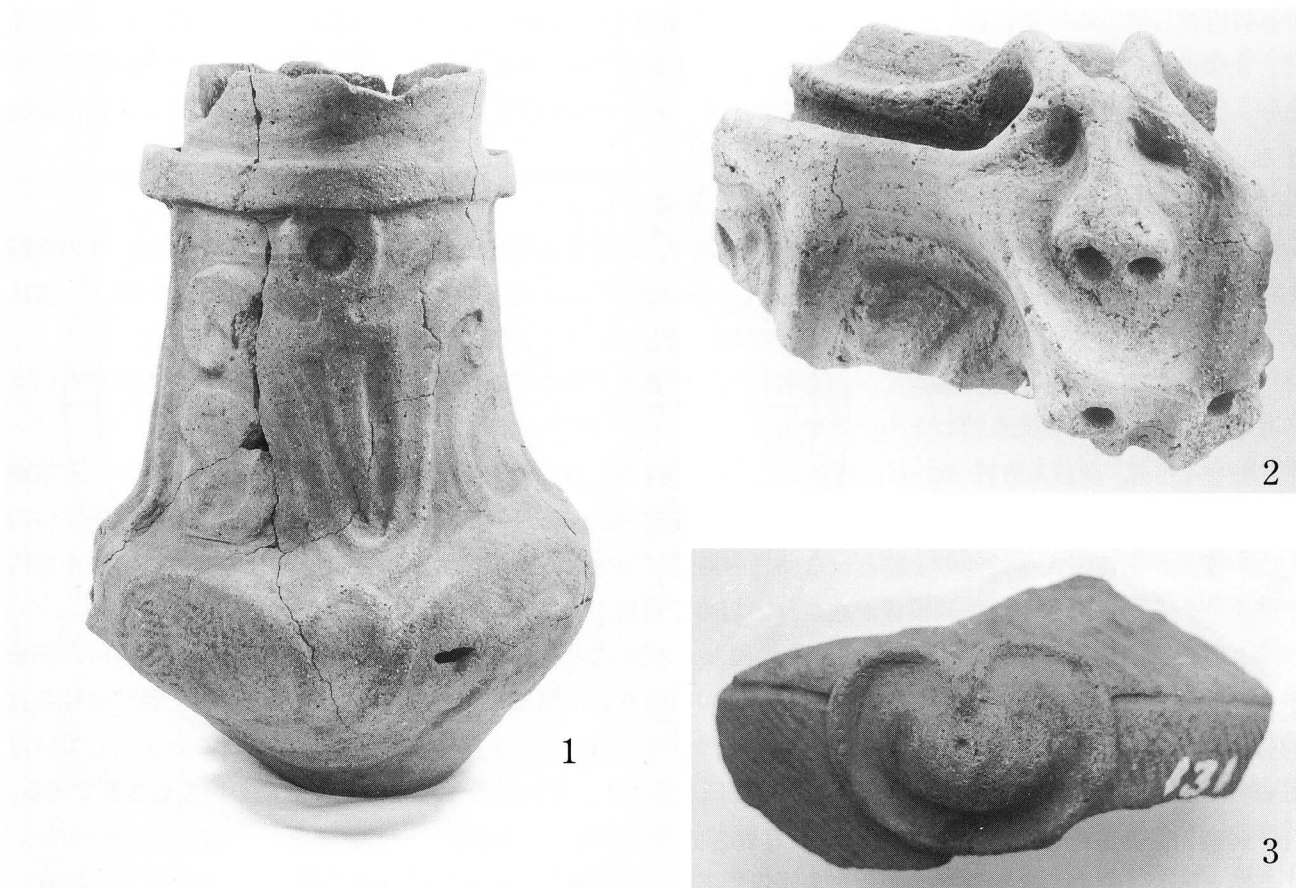


写真3 関連資料写真(縮尺不同) 1:上栃窪 2:寺山金目原 3:坂井

(8) 長野県上伊那郡南箕輪村久保上ノ原遺跡出土例(図2-4, 写真1-4)

南箕輪村教育委員会による1997年の発掘において40号住居址より出土し、次のように報告されている¹¹⁾。

住居址西側壁下より出土。中期中葉頃と思われる。

高さ29.9cm、口径21.3cm、胴径35.6cmで、欠損部も多い。

土器の形態は中央がややくびれたヒョウタン形をなし、全体に赤色塗彩が施されていたと思われる。土器正面に人体文、裏側に橋状の把手が付く。人体文は高さ19.9cm、幅12.2cmで、頭部の一部と両手の肘より先の腕部分、及び左足つま先部分が剥落している。顔は楕円形につくられ、その下にへの字形の隆帯が付く。腹部は膨らみをもち、そのラインは出尻土偶に類似する。

(9) 長野県木曽郡大桑村大野遺跡出土例(図2-5, 写真1-5)

大桑村教育委員会による発掘において22号住居址より出土し、次のように報告されている¹²⁾。

口径推定23.8cm、底径推定16.5cm、器高推定42.5cmを測り、最大32.2cmと丸く張った胴部の正面ほぼ中位に縦24.2cm横25.3cmの人面装飾が付く。人面装飾部に赤色塗彩の痕跡が、かすかに観察される。裏側については、破片が皆無であり詳細は不明。中期中葉井戸尻Ⅲ式期。

以上の9例は、ほとんど中期前半(前・中葉)の勝坂、藤内・井戸尻式期に属し、その分布は山梨県を中心とした西関東から長野県中・南部にかけての範囲であり、人面装飾付深鉢形土器のもつとも発達したⅣ類と、時期も分布も一致している。また出土状態・残存状態およびモチーフにおいても、「死と再生」の儀礼を示唆していることも、共通する特徴として指摘することができる。特に原山遺跡例は、その儀礼に一步踏み込んで理解する大きな手がかりを提供しており、きわめて注目される。

3. 関連資料の検討

関連資料とされるのは、器形と文様において人面装飾付有孔鐙付土器の変化形態とみられるもので、5遺跡よ

り8例出土している。福島県1例・神奈川県1例・山梨県1例・長野県2遺跡1例である。長野県にもっとも多く、山梨県の2例も長野県寄りの地域である。この分布状態は人面装飾付有孔鐔付土器のそれとほぼ同じであるが、大きく離れて福島県下に拡大していることは、注目すべき相違点である(図1)。これらを東から順に検討する。

(a) 福島県相馬郡鹿島町上栃窪遺跡出土例(図4-1, 写真3-1)

鹿島町教育委員会による1967年の発掘調査において、中期末大木10式期の敷石住居址が検出され、この壁際の床面より、有孔鐔付土器類似土器が出土した。全体の形状は有孔鐔付土器ときわめて類似しているが、鐔はあっても小孔をもたない点は異なっており、退化形態とみることができ、次のように記されている¹³⁾。

中心の炉から東方1.7mの地点に、口を外に向けて倒れている壺が発見された。花びん型とでも呼びたいような幾分先細りの長大な頸つきの土器である。

口径12cm、胴部の直径19.7cm、高さ29.5cm。口縁部に近く幅1.5cmの「たが」状の凸帯があり、左右両端は紐通しの穴となっている。この穴から肩部の耳(欠損して痕跡だけ)へ紐を挟むかのように二条ずつの太い隆線がある。文様は他の土器とほぼ同様の隆線に囲まれた磨消に加え、更に盾型様のものにゆがんだ円形をくみ合わせた異様な曲線模様が施され、極めて複雑である。

これらの磨消縄文は太いS字形を呈し、典型的な大木10式の文様である。そしてこの磨消縄文を除いた部分が人体文である。目鼻を省略した顔、両腕と胴部が表現され、脚部を欠いている。中期前半の土偶装飾付有孔鐔付土器が器形・文様をやや退化させつつも、時期が下り東北地方南部にまで伝播していることを示している好資料である。また酒器として発達した後期の注口土器への、連続性を示唆している点においても重要である。

(b) 神奈川県秦野市寺山金目原遺跡出土例(写真3-2)

秦野市教育委員会の発掘資料であるが未報告である。ご好意によって使用させて頂くことができた。現在同市立桜土手古墳展示館に展示中。

有孔鐔付土器の変化形態とされる両耳壺の、把手部分破片に人面がみられる。破片の大きさは高さ8.2cm、幅11.6cm。時期は中期末の曾利V式期。

(c) 山梨県韮崎市坂井遺跡出土例(写真3-3)

志村滝蔵氏の発掘資料である¹⁴⁾。

金目原遺跡出土例と同様に、両耳壺の胴部に人面がみられる。破片の大きさは高さ6.8cm、幅12.5cm。目鼻を欠くが、眉と口が表現されている横長の顔の大きさは、高さ4.9cm、幅6.2cm。中期後半とみられる。

(d) 長野県諏訪郡富士見町井戸尻遺跡出土例(図3-2・3)

藤森榮一氏らによって発掘された有孔鐔付土器が2点みられる。共に中期前半の井戸尻I式期の4号住居址出土品である¹⁵⁾。

第1例は壺形で、高さ30cm(図4-2)。

第2例は3段くびれの樽形で、高さ35cm(同3)。

筆者が注目するのは、人面装飾こそみられないが、共に上部に3本指をもつ両腕が表現されていることである。これは人面・土偶より表現は退化しているが、土器自体を女神の身体を示していることではよりシンボリックであって、逆に思索の深さを示していると考えられる。この観点からは二つの視座が開けてくる。

まず明らかに人面・土偶装飾のみられるものと、腕だけで同様に女神の身体を示す場合があることは、その延長上にそれらがなにもみられない場合についても、土器自体女神の身体を示唆していると考えられてくる。したがってくびれをもつ樽形の場合について、それを豊満な女神の身体の別な表現とみなされるのではなかろうか。

(e) 長野県諏訪郡富士見町中道尾根遺跡出土例(図4-4)

藤森榮一氏らによって発掘された有孔鐔付土器が1点みられる¹⁶⁾。井戸尻遺跡第1例と同じ壺形で、高さ37cm。中期前半の藤内II式期である。

本例の注目点は、井戸尻遺跡例のような部分的省略とは異なり、人体文自体の退化表現がみられることである。

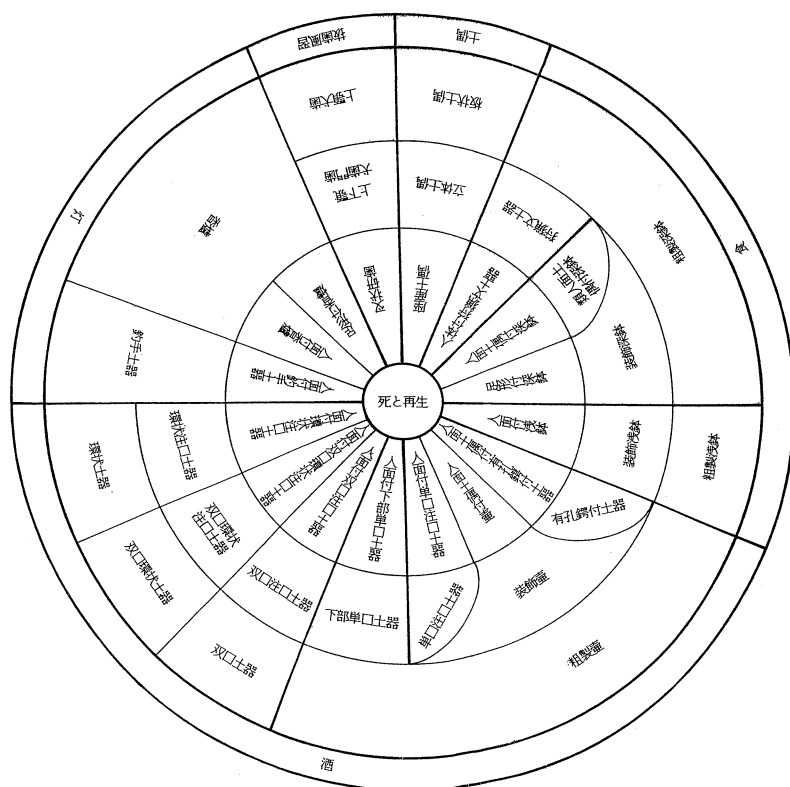


図5 人面・土偶装飾付土器の体系

そしてこの延長上に、我田引水にならないように抑えている多くの人体もどき文が位置しているとみられるのである。

以上の6例は、中期前半の2遺跡3例と、同後半の3遺跡3例とにわけられ、前者は長野県、後者は山梨県・神奈川県から福島県にまで及んでいる。そして前者には人面・土偶装飾の表現上の退化がみられ、後者には器形上の退化がみられる。しかし前者にあっては典型的な表現、退化的な表現、そして無表現の例まで時期的には共存しているのであって、有孔罎付土器を女神の身体とみなす観念は共通しているように考えられてくる。ではその違いはなにを表しているのが問題になるが、これは表現のみの違いとみれば、祭祀の

重要度の強弱ということが推定されてくる。

後者についてみるならば、酒器として女神の身体から祭祀に当って酒を頂くという行為が、土器の形態変化に関係なく持続し、後期に一段と発達する注口土器へと連続することわ示唆するものとして重要性が指摘できるのである。

4. 考察

まず他の人面・土偶装飾付土器との関係について検討することにする。

人面・土偶装飾付土器の主流は、縄文土器自体がそうであるように深鉢形土器である。そしてこれは祭祀における煮炊きの道具であることは確実視される。釣手土器もまた藤森栄一氏によって強調されてきたように、祭祀における灯火具である。そして有孔罎付土器については、太鼓説を排して酒器と考える方が合理的である。それらを整理し、あわせて中期から後・晩期にかけての時間的変遷を矢印で示せば、下記のようなになる。

食 人面装飾付深鉢形土器
 灯 人面装飾付釣手土器 ⇒ 人面・足形装飾付香炉形土器
 酒 人面・土偶装飾付有孔罎付土器 ⇒ 人面装飾付注口土器

これらは祭器としてセットを構成するものであると考えられる。

次に各器形のなかの関係について検討すると、前節で検討したように、人面・土偶装飾の典型例、退化例、そして無装飾例などの各段階が並存していることに注目される。それらは単純に人面・土偶装飾のあるものと無いものとに2大別することはできないのであり、相互に共通した観念で統一性を有していたと理解される。そしてその表現の強弱は、祭祀の重要度の違いであったと推定される。それらの数量の違いを考慮した相互関係は、典型例ほど数は少なくピラミット体制の三角形になり、それらを横に繋いでいけば図4のような円体系に整理することができる。したがってその観念の内容は、当然ながら典型例に探ることになる。

そしてその観念については、すでに人面装飾付深鉢形土器や釣手土器について、吉田敦彦氏や筆者らによ

て言及されているように、女神がその身体を焼かれることなどによって死に、新しい生命の誕生を願う「死と再生」の神話の存在が見えてくるのである。人面・土偶装飾付有孔鏝付土器においてもまた同様な観念に支配されていたと見ることができる。

註

- 1a) 渡辺 誠「人面装飾付の釣手土器」『比較神話学の展望』青土社 1995 年
 - b) 渡辺 誠「人面装飾付注口土器と関連する土器群について」『七社宮』福島県浪江町教育委員会 1998 年
 - c) 吉本洋子・渡辺 誠「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第 1 号 1994 年
 - d) 吉本洋子・渡辺 誠「人面・土偶装飾付深鉢形土器の基礎的研究(追補)」『日本考古学』第 8 号 1999 年
 - 2) 註 I の c・d
 - 3) 長沢宏昌「有孔鏝付土器の研究」『長野県考古学会誌』第 35 号 1980 年
 - 4) 長瀬 衛「原山遺跡第 7 地点調査概報」『東京都調布市埋蔵文化財年報—平成 5 年度—』 1995 年
 - 5) 日野一郎他『厚木市史』地形地質・原始編 1985 年
 - 6) 清水 博他『鋳物師屋遺跡』 櫛形町文化財調査報告 12 1994 年
 - 7) 志村滝蔵『坂井』 1965 年
 - 8) 佐野 隆「諏訪原遺跡」『2003 年度上半期遺跡調査発表会要旨』 山梨県埋文センター・山梨県考古学協会 2003 年
 - 9) 藤森栄一編『井戸尻』中央公論美術出版 1965 年
 - 10) 江坂輝弥他『日本原始美術』1 講談社 1964 年
 - 11) 友松 諭『久保上ノ平遺跡』 長野県南箕輪村教育委員会 1997 年
 - 12) 百瀬忠幸他『中山間総合整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 木曾広域連合他 2001 年
 - 13) 相馬高校郷土クラブ『福島県相馬郡鹿島町上柗窪敷石住居址発掘調査報告書』相馬郡鹿島町教育委員会・福島県立相馬高校郷土クラブ 1967 年
- このガリ版刷りの本書は後に文献資料刊行会によって、1974 年に復刻されている。なお、実測図は『鹿島町史』第 3 卷(西戸純一他、1999 年)より引用。
- 14) 7 に同じ。
 - 15) 9 に同じ。
 - 16) 9 に同じ。

謝 辞

本稿をまとめるに際しては、次の方々から多くの御教示と御高配を仰いだ。末尾ながら銘記して深謝の意を表する次第である(五十音順、敬称略)。

赤城高志・大倉 潤・大竹憲治・小野正文・神村 透・佐野 隆・志村滝蔵・友松 諭・長沢宏昌・長瀬 衛・西戸純一・平出一治・百瀬忠幸・吉野高光・吉本洋子・木曾広域連合遺跡調査会・調布市教育委員会・秦野市教育委員会・南箕輪村教育委員会

付 記

脱稿後、山梨県東八代郡一宮町釈迦堂遺跡群塚越北 A 地区と同北巨摩郡小淵沢町中原遺跡より、各 1 例の土偶装飾付有孔鏝付土器が出土していることを知った。所論と相反するものではなく、逆により分布密度を高める資料といえる。さらに類例の増加を期待したい。